巻頭言
No.177

いのちを拡げる

大阪大学教授（栄誉教授）
2025年大阪・関西万博
テーマ事業プロデューサー

石黒 浩

「大阪・関西万博」のテーマ事業プロデューサーを引き受けるにあたって、万博を開催する意義について考えました。そして、「世界中の人、一人ひとり、特に若い皆さんに自分の未来を考えてもらい、未来への希望や目標を持ってもらうことだ」という結論に至りました。1970年の大阪万博では、将来、科学技術を用いて如何に豊かになれるかが考えられ、携帯電話、ロボット、リニアモーターカーなどの未来社会が示されました。その後50年以上に亘る研究開発の結果、それらが実用化されていきました。このように未来に向けた展示から希望が生まれ、現代社会が築かれたのです。「大阪・関西万博」の展示も、次の50年に影響を与え続けるものにしなければなりません。一方、既に我々は、その気になれば、遺伝子操作技術を用いて人間を設計することも、エネルギー技術で環境を守ることも破壊することもできるという「神のような力」を手に入れています。「大阪・関西万博」では、単に豊かさだけでなく、人間と地球環境の未来を念頭におき、多様な価値観と幸福感で発展する未来を考える必要があります。来場者がそれぞれの価値観で未来を考え、具体的にイメージしてもらえる機会にしていただければと期待しています。

私の担当テーマは、〈いのちを拡げる〉。人間は科学技術で進化し、「いのち」の可能性までをも拡げ始めています。パビリオン「いのちの未来」は黒を基調とした外観で、「いのち」の象徴である「水」を生かしたデザインです。外装材には膜を使い、その上を水が流れます。導入部分では、これまで日本文化の中に宿してきた「いのち」の歴史を展示します。そして2つ目のゾーンでは、「50年後の未来」を描きます。50年後いのちはどこまで進化し、どんな幸福をもたらしてくれているのか、多様な企業の若手社員やクリエイターが考えた50年後の社会や製品・サービス、約30体のロボットと約20体のアンドロイドを使って、人間がロボットやアバターと共に暮らす未来を体験してもらいます。ロボットとの距離がもっと近くなれば、人間のいのちの可能性はさらに拡がっていくでしょうし、諦めていたことに挑戦したり、新しい夢が生まれたりするでしょう。

「1,000年後の未来」も展示します。1,000年後の未来は現在と違い、人間とロボットの境界がなくなり両者は1つになると、私は考えています。人間とロボットが融合した世界はどうなるのか、1,000年後のいのちはどこまで飛躍し、どんな自由と生きる喜びが待っているのか。1,000年後の未来を象徴するアンドロイドとして展示します。ここでは、アートな作品になるということだけをお伝えすることにしておきます。全部話すと、楽しみが減ってしまいますから…。ご来場をお待ちしております。

石黒 浩（いしぐろ ひろし）

大阪大学大学院基礎工学研究科 教授／栄誉教授
1991年 大阪大学基礎工学研究科博士課程修了。工学博士。京都大学情報学研究科助教授、大阪大学工学研究科教授を経て、2009年より現職。17年大阪大学栄誉教授。国際電気通信基礎技術研究所（ATR）石黒浩特別研究所客員所長。科学技術振興機構・ムーンショット型研究開発事業・プロジェクトマネージャー。2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）テーマ事業プロデューサー。